

「——ロン、時間よ」

流れて来た声は、キャスターばりの綺麗なキングスだった。  
これだけの美声なら、声だけでコロッと惚れてしまう男は後を絶たないだろう。

……それが人類の音域の範囲だったらの話だが。

「……眩暈がする」

そんな事を考えなら、眩く。  
見上げた天井は、殆ど使っていない自宅と遜色ない位に真っ白い。

眩暈は、いつもの事だ。

「起きていたんですか？ なら、執務室においで下さい」

「分かってる。だが、眩暈が酷い」

「その言葉はもう三年近く聞いています」

「……君は優秀だな」

ぼやく様に呻いて、『仕方がない』と頭を振る。  
ここに来て、快調だったためしなど無い。

そんな様子をマイク越しでも感じ取ったのか、天井からはくぐもった様な声が漏れた。  
ただし、彼女と三年近く付き合っていなければそうだと感じ取れないような甲高さだったが。

「仕事がたまっています」

「減れば増える仕事がか？」

棚から書類を綺麗にしてやれば、5分後には棚一杯に書類が詰まる。  
それがこの仕事だ。

「そうです」

ピシヤリと言われてしまう。

「……そうかい」

互いの境遇への同情を誘うような言葉を使ったつもりだが、彼女にとってはただ『小賢しい』だけだったのだろう。

『鉄の女』という言葉は、彼女の為にあるような物だ。  
あいにく、彼女は鉋物系ではないが。

「執務室への到着時間は過ぎています。執務開始まで……あと、30秒です」

「おいおい、ちょっと待ってくれよ！ 確かに君は優秀な秘書だが、秒単位でスケジュール管理してくれるほど優秀だとは知らなかったぞ！？」

「あと、15秒です」

皮肉たっぷりに天井に抗議してみたが、彼女のやたらと甲高いカウントは止まらない。

「3、2、1……執務時間が始まりました。超過時間を報告します……1、2..」

「分かった。もう降参だ。頼むから、その不愉快なカウントをやめてくれ……」

「了解」

答えた彼女の声が、マイク越しでも分かるくらいに揺れた。  
笑ってやがるのだ。忌々しい。

「では、超過分は給与明細に反映しておきますね。ロン」

まるで『買い物リストを書き直しておく』ような気軽さでそう言って、彼女はマイクを切った。

こんな気軽に『忌々しさ』を『憎たらしさ』にステップアップさせる女を、俺は他に知らない。  
もしかしたら、人類には居ないのかもしれない。

あゝ？ 今は人類じゃなくて『地球人類』だったか？ ……………どうでもいい。

「……あー」

呻きながら、もう殆ど自室と化してしまった仮眠室の私物棚を探る。

あったあった、コレだ。

「用法・用量を守って正しく使いましょう」

呟いて、適当に口に放り込む。

精神安定剤の類だ。

今みたいにマイク越しなら皮肉の一つも飛ばせるが、実際にご面会となったら3秒と持たずにラリっちまう。

この職場には必須アイテムだった。

「……さーって」

下着をはく。

上着を着る。

ガウンをかける。

……よし、薬が回ってきた。

「行くか」

目頭を押さえる。  
眩暈と吐き気がするのはいつもの事だ。

「体調は万全だな」

呟いて。  
念の為、隅っこで神様にもお祈りして、俺はやたらと真っ平らなドアを開けた。

# 星の彼方にて

作:マヒロー

『黄色い猿は所詮猿だ』

生前、祖父がよくそう言っていたのを覚えている。  
意味は読んで字の如くだ。

柔らかい言い方をするならば、

『俺達はいいつらと同じじゃない！ 違う！！』

とこう叫びたかったのだろう。

祖父は第三次世界大戦を経験していて、再びグレムリンの如く襲い掛かってきたアジア人連中  
を目に付く端からブチ殺した過去を持っていたが、別に差別主義者というわけではなかった。  
レイシスト

ただ単に、祖父は『違うんだぞ！』と『同じじゃないんだぞ！』という事が言いたかったのだ。

それを子供が興味を持ちやすい過激な表現を使って、  
当時三歳だった鼻垂れの俺に教育しようとしていたんだと思う。

教育委員会や人権庇護団体なんかが聞いたら怒りだして裁判沙汰に成りかねない様な教育方針だったが、その方針は概ね間違っていなかった。

思い出の祖父は言う。

「いいか、小僧。百歩譲って、奴等と俺達は分かり合えとしよう」

「だがな。だからと言って、『同じ』だって事にやなりやしねえ。全然『違う』んだよ。そりゃもうハッキリと明確に、まるで『同じ』じゃありやしねえ」

「そりゃ、深く付き合っていきゃ良い所も出てくるさ。だがな、最初に目に飛び込んで来たときのあの嫌あーなあの感情を忘れるな。つまるところ、何処までいっても奴等はその延長線上だ」

「勿論、それは奴等にとってもな。……分かるか？ 坊主」

正直な所。

祖父の言ってる事なんて、当時三歳で鼻を垂らすのが仕事の俺には何一つ分かりはしなかった。

だが、犬に躰を教え込むように、

祖父がうわ言でまで繰り返したこの言葉は、意味ではなく音で俺の脳みそに刷り込まれ。

そしてそれは大いに役に立った。

——祖父の言う『違う』奴等が、ドヤドヤと大群で現れたからだ。

\*\*\*\*

「おはよう、ボス」

執務室前に入ると、愛すべき書記どのが既にデスクに座っていた。

「おはよう、レニー」

自分でも驚くぐらい滑らかに、朝の挨拶を交わす。

今日は薬が良く効いてるらしい。吐き気も無い。

そんな俺の様子に気が付いたのか、レニーはご自慢の触覚を上下にパタパタと羽ばたかせた。

「おお、ボス。今日はえらく体調が良いみたいだね」

「そうでもない」

「そうかい？ まあ、確かに今日の遅れ方は酷い。女神様はカンカンだよ」

カリカリと金属を引っ掻いた様な発音で、レニーは続ける。

「今日は一段と艶やかな彼女が見れるよ」

「違いねえ」

適当に相槌を打つと、  
カタカタと、骨格を鳴らすようにして彼は笑った。

彼の名はレニー。  
本当の名前は違うが、地球人類の俺では発音出来ないからレニーで通させてくれ。  
この惑星出身のスタッフだ。書記をやってもらってる。

彼の皮膚は硬い外骨格に覆われ、  
頭部に付いた長い触覚で空気の振動を察知して相手を知覚している。  
あまり遠くは無理だが、彼のそのチャーミングな複眼は360°全方向を見渡せるという優れものだ。

——要は、地球でいうところの『昆虫』にそっくりなのだが。

「どうしたいボス、顔色が悪いぜ。また例のあの病気かい？」

「いや、大丈夫」

ちょっと興奮してしまった。落ち着け。

息を吸いなおして、呼吸を整える。

そうだ……そうだぞ、見た目は関係ない。  
彼は非常に気が利くし、ジョークもこなせる優しい男じゃないか。  
ただ、ちょっと笑い方が個性的なだけなんだ。そう、何にも異常なことなんて無い。

医者に処方されたもう三年も続けている思考法を実践している間に、愛すべきレニー君はデスクから一枚の手紙を取り出していた。

「ところでボス、手紙が来てるよ」

ホイっと、彼の毛が生えていてついでに鎌まで生えている手から、手紙が渡される。  
宛名を確認すると、両親だった。

「またか」

きっとまた、『孫の顔はまだか?』というような気が狂った内容に違いない。  
この星での地球人類の男女比率は99:1だっていうのに。

「察してあげて下さい。寂しいんですよ」

そう言って、彼はまたカタカタと笑う。

「……ありがとう」

礼を言って、ポケットにそれを突っ込んだ。

……彼の見た目が、普通に地球で見られるような、ニヒルに歯を光らせた優男だったらどんなに良かったろうに。

そんな失礼な事を思いながら、執務室のドアを開けてもらうと、

「お目覚めのご機嫌は如何ですか? Sir」

酷く艶やかな女神様が待っていた。

\*\*\*

「お目覚めのご機嫌は如何ですか?」

キンッと、ハウリングの様な声を通る。  
ドアが閉まるより先に飛んで来たのは、皮肉だったらしい。

「うん、悪いとは言えない」

曖昧に答えると、後ろでレニーがカタカタと軽快に骨格を鳴らす。  
そのままドアを閉めた。

水臭い奴だ。

「それは結構な事です」

お姫様はカンカンだった。  
それは別に彼女と三年の付き合いがなくとも一目瞭然だったが、彼女と付き合いが長いともっと分かりやすい。

怒ると、その頭上にある豊かな髪が見た目も鮮やかな程に艶やかになるのだ。  
生物学的に正確に言うなら、彼女の頭に無数に蠢く触手が反射性のある粘液を普段より多く分泌するという事になる。

……ああ、眩暈がする。

「先ほどの時間は休憩時間に取り戻して下さい」

そんなこちらの様子を知ってか知らずか、彼女は暴言を追加した。

「ティル君、それは……」

「給与明細の方がお好みですか？」

「……分かった」

あまりに優秀な秘書だと、給料も管理されるらしい。

「では、本日の業務になります。午前中は書類での決裁を中心に——」

つらつらと、一つ繋ぎの言葉の様に彼女は業務を述べていく。

今朝も言ったが、まるで淀みが無いキングスだ。

発声不可能なほど甲高い声でなければ、きっと普通の地球人類との違いを感じられないだろう。

「午後からは——」

彼女。

ティル・バーキンは、この銀河の果てで三年も一緒に仕事をしている通訳兼秘書だ。

彼女一族。つまりフティムル星由来の種族は、他言語やそれにまつわる文化を理解するのにかなりの素養がある。

この淀みのないキングスも、彼女は3週間程でマスターしてしまった。

その素養を最大限に生かして、彼女一族はこの銀河中で通訳として成功を収めているらしい。

故郷の惑星に定住する事に拘らず、方々の場所で活躍している者が多いそう。

以前、彼女が

『私達は、あなたの惑星<sup>ほし</sup>で言えばユダヤ人みたいなものですよ』

と言っていたが、ピンと来なかった事を覚えている。

根無し草的な事が言いたかったのだろうが、ユダヤの連中は第三次世界大戦の折にちゃっかり自分の国を作っていたのでその後に物心付いた身としてはイマイチな例えだった。

「——聞いてますか？」

ボヤっとしているのを見抜かれたらしい。

というよりも、ボヤっとしてしまっていた。

……駄目だなこの薬は。効能は薄いくせに、副作用はキチっとあるらしい。

「聞いているよ。どうせまたあの連中の事なんだろう？」

「確かにそうですが、情勢は変わってってます」

「連中の有利な方向にな」

「……」

凶星だった様だ。  
珍しく、彼女のほうから黙る。

「その様子だと、また無理難題押し付けて来たようだな」

「ええ、まあ……向こうがそう思っているかは微妙ですが」

「あー」

大げさに呻いてみせた。

「次から次へと、何で『支配者』ばかり来るかなあ……」

先月から現れた新たな『支配者』のもたらすストレスに、胃の腑が引き裂かれそうだった。  
ただでさえ、ストレスの無い職場とは言えないのに。

「……」

「……？ 何ですか？」

「いや……」

この優秀な部下達の奇天烈な見た目に、三年経っても慣れたとは言えない。  
眩暈がするし、頭が痛いし、吐き気もするし、胃は痛みっぱなしだ。

「……どうしてこうなった」

彼女に聞こえないよう、消え入るようにそう漏らす。  
嘆いたって仕方が無いが。

「あの、」

「分かってる。まずは書類から片付けようか」

そう自分に言い聞かせ、減らしても増えるばかりの書類棚に手を伸ばした。

\*\*\*



「正気か？」

この職場に来て、12度目の『支配者』様が言い出した事は中々にクレイジーだった。  
あるいは、通訳が間違っているのかもしれない。

思わず口から漏れた言葉だったが、ティルに睨まれてしまった。

「通訳出来ない事をあまり言わないで貰えますか？ 怪しまれてしまいます」

「こいつらが、か？」

大げさに肩を竦め、顎をしゃくってソレを示す。  
ティルの髪が、僅かに濡れた。

「完全に理解できないレベルの異文化で良かったですね……あやうく、外交問題ですよ」

「無理だろ。どうしたら外交問題に出来るのかも分からん」

「……もう黙っていてください」

器用に舌打ちの真似事をして、ティルは俺を黙らせる。

今は会談の席だ。  
自称、『外宇宙の支配者様』との会談だ。

俺だって相手に分からないと思ったって、普通はこんな無礼な態度を取ったりしない。  
やる気はなくなっても、最低限の職務意識くらいはある。

だが、今回の会談の相手はそれを容易に打ち破る様な連中だったのだ。

——カチッ、カチカチカチカチカチッ。

「……貴方が何を言っているのか、尋ねてきています」

会談部屋に、金属を擦る様な音が響く。  
それに合わせて、ティルがそれを通訳した。

「おべっか使ってるだけでも言っとけ」

「……了解です」

カチカチカチカチとティルが通訳するのを尻目に、相手の様子を確認する。  
相手は一人ではなかった。

「……」

見た目は、凄く硬そうだ。

白だったり、薄茶色の奴もいたり。  
形もここに居る 1、2……8 人だけで千差万別だ。

こちらで『人類』と呼ばれる連中は長ひょろい外見の奴が多いが、こいつらは丸いというか、ズンと重そうというか、そのくせ形が一定じゃないというか、尖ってる奴もいれば丸い奴もいるというか。

「やめた」

ポソリと呟く。  
ティルが凄い顔で睨んでくるが、かまうもんか。

「石ころじゃねーか」

そうなのだ。  
こいつら、見た目はまるつきり石ころなのだ。

両手サイズよりちょっと大きい位の、地球の河原に行けば何処でも転がってる様な石ころなのだ。

こいつを『人』だと思えだど？ 無茶言うな！ カチカチうるせえだけじゃねーか！！

しかもだ。  
こいつらの要求が、またふざけてやがる。

正確な通訳だと色々と修飾語が付いてたが、  
要は、『殺されたくなかったら自殺しろ』と言っているのだ。

今まで『殺されたくなかったら——』のフレーズを使う自称『支配者』様は沢山いたが、大抵は後に続く言葉は『奴隷になれ』的な可愛いもんだった。

ここまで頭がおかしい要求は初めてだ。

というか、頭が有るのかこいつ等は？

「そういや、理由は何て言ってんだ？」

ティルが意図的にその部分を俺に伝えていない事は分かっていたが、一応尋ねる。

「それは、」

少し渋る様な声を出したが、溜息を付く様に彼女は続けた。

「目障りだからだそうです」

「ハア！？」

流石に我慢の限界だった。

「おい、こら石ころ共。舐めるのも大概にしろよ」

「やめてください」

「いいか石ころ？ 主成分ケイ素のくせしやがって……あ、通じてねえのか、ティル、通訳しろ」

「本当にやめてください。彼らを怒らせるのは、」

「黙ってろ、上司は俺だ。いや、やっぱ黙るな、通訳しろ」

睨み付けてやると、ティルは深々と溜息らしきものを吐いた後に渋々通訳しだす。

「よし、それでいい。おい、石ころ！ いや、『支配者』様だったかな？ 調子に乗るのもこの辺りで最後にしたらどうだ。『支配者』さまなんてな、この無駄にだだっ広い銀河の中じゃ腐る程居るんだよ。分かる？ お前らだけじゃないの？ 強いのは、自分だけじゃないってママから習わなかった？ ママは多分、いねーんだらうけどよ」

石ころ共は、何も反応しない。  
ただ、カタカタと左右に揺れる。

ビビったか？

気を良くした俺は、もう一步身を乗り出して、

「大体、こっちの文化圏じゃよー、お前らみたいな奴等は資材にしかなくてねーんだよ。ホラ、俺が座ってるこの椅子。これにだって、あんたらの中身の詰まってない頭の中が——」

コツンと石ころ共の真正面をノックした瞬間。

——カッ！

と音がする様な光が、通り過ぎた。

「え？」

光源の元は、応接室の壁一つを占領するデカイ窓。

「……今、ビッグ・フライが消滅しました」

淡々と、冷静にティルはそんな事を言った。

は？ 今、何て言った？ 消滅したって言ったのか！？

「ちょっと待て、聞き間違いか？」

「違います。惑星時間 00070504、座標は Aの1700番にて、ビッグ・フライが消滅しました」

「ふざけるなよ」

いや本当にちょっと待てよ。  
ビッグ・フライってアレだぞ。地球で言えば月みたいなもんだぞ。  
しかも、サイズは月の7倍はあるんだぞ？

「だから言ったんですよ」

ティルは、何処か投げやりだ。  
こうなる事が分かっていたらしい。

「ティル、もう一度聞くぞ。ビッグ・フライは消滅したのか？ 地表が吹き飛んだとか、一部欠けたとか、ヒトの顔をしたクレーターが出来たとかじゃなくて、本当に跡形も無く消滅したのか？」

手にしていた端末を小刻みにタイプしながら、ティルは尚も冷静に答える。

「消滅しています。直径30cm位の消し炭は残っている様ですが、御覧になりますか？」

「それはいい」

ティルのあまりの冷静さと、目の前の石ころ共が急に放ちだした迫力で理解した。

どうも、本当に一瞬でビッグ・フライは消し飛んだらしい。

「光学系か？」

「その類の様です。尚、この基地の索敵能力では狙撃地点を補足出来ません」

「索敵妨害の形跡は？」

「いえ、ただ遠すぎるだけです」

「……っ、くそつたれが」

つまり、お手上げて事だ。

「無人の衛星だった事が幸いしましたね」

「バカヤロウ、あそこには恒星間通信設備があったろうが。アレが無きゃ、ここからじゃ定期船以外での通信手段がねーぞ。援軍も呼べない」

「意味があるんですか？」

「……」

正直、無いだろう。

ここは一応、外交上の前線基地みたいなものだから索敵能力はこちらの文化圏ではダントツだ。

その自慢の索敵機器が全く反応出来ず、攻撃地点の補足すら出来ない。

しかも一瞬であの威力だ。

こちらの文化圏でもやろうと思えば出来ない事はないが、準備に2ヶ月は掛かる。それに射程は宇宙空間なら目測が出来る距離だろうし、しかも光学兵器じゃない。光学兵器用のシールドなんてものは、まだまだSF小説で現役なくらいだ。

要は、どんな大艦隊が来ても射程外から良いようにリンチされるだけだって事だ。

「ロン。とりあえず、座ってください」

少し呆けていたらしい、名前を呼ばれて我に返った。

「……それで、こちらの石こ…ゲスト達はなんと？」

咳払いをしつつ、席に座る。  
答える彼女の顔は冷ややかだ。

『この位やってやれば、我々が唯一無二の支配者だという事は蛮族の低脳さでも理解出来たろう？』と言っています」

「そうね。そうかもね……」

まだチカチカする目頭を押さえながら呟く。

この職場は、『忌々しい』から『憎たらしい』にクラスチェンジする奴等ばかりだ。

「どうします？」

何処か他人事のように、テイルは尋ねてくる。

「えーっと、こいつらの言い分なんだったっけ？」

「自殺しろです」

「……どうにか出来ないか？」

「給与外です」

キッパリと言い捨てた彼女の髪は、しっとりと濡れていて。

その後、  
彼女の言う『給与外』を給与内の収めるのに、俺が残業した事は言うまでもないだろう。

\*\*\*

それから数日、様子を見つつ、情報を集めた。

石ころ共は強大だ。

もう、俺の語彙の範囲など軽く超えるレベルで強大だった。

『自殺しろ』なんてワケの分からない要求をしてくるのも、あんまり強大過ぎて『死に方くらい選ばせてやる』というただの余裕でしかない。

どうにもならない事態にぶち当たれば、おかしくなる。

\*\*\*

仕事帰りにバーに寄ると、見知った顔が居た。

……安定剤を飲んでいて助かった。

「こんばんわ、ロン」

「ああ。こんばんわ。ティル」

行きつけのバーのいつもの席の隣に座っていたのは、ティルだった。

三年来の秘書殿の顔は火照っていて、どうももう随分飲んでいるらしい。この辺りは、地球人類にそっくりだ。

「お酒を飲みにきたんじゃないんですか、ロン？」

「……ああ」

何故だか挑発的な彼女に促されて、俺は席に座った。

「どうしてここに？」

ティルを今までこの店で見たことは無い。

「……別に」

グラスを揺らして、ティルは遠い目をする。

見つめる先は、バーテンの背中の先の宇宙。

おそらく、吹き飛ばされた衛星の残骸でも見ているんだろう。

「仕事の事か？」

「どんな緊急事態でも、仕事の話は仕事でします。給与外の事はしないつもりです」

そうだった。ティルはそういう奴だった。

「お酒、頼まないんですか？」

「こっちの酒は飲めなくてな、ここにはつまみを食いに來るんだ」

「……へんなの」

場所と雰囲気不知所為なのか、今日の彼女はちょっとおかしい。  
心なしか、彼女の髪がいつもよりも濡れている気がする。

「怒ってるのか？」

何気なく聞いたつもりだったが、彼女はむせた。

「……ほんと、あなたらしいわ」

「？」

「いいえ、気にしないで下さい。怒った時じゃなくて、感情の高ぶりがあった時にこうなります」

『分かりますか？』と目線彼女は聞いてくる。

「へえ」

どうしてまた？ と聞く前に、彼女から答えた。

「私は、ここには調べて來たんです。仕事場でなく話してみたくて。ロン、貴方と」

『結構、緊張しています』と彼女は付け加える。

「別に話したければ職場で話せば良い」

「……『職務中は職務に限る会話を』、と契約書に記してにあります」

「そうだったか？ ……君とは、朝の会話で結構話すから忘れていたよ」

「そう……そうです、そうですね」

彼女の何かに、触れたらしかった。  
少し思案する様な表情で考えて、彼女は笑う。

「なんででしょうね」

酒の所為か、彼女の瞳が揺れる。  
グラスに映る彼女の肢体が、妙に艶めかしい。

フタイムル星人は、頭部以外は地球人類と酷似している。  
もし、彼らが帽子で頭部の触手を覆ってしまえば、発声以外で彼らを見分けるのは難しいだろう。

……実際は、呼吸の関係でそれは不可能なのだが。

「おつみまみは？」

気付くと、彼女が此方を覗き込んでいた。

「あゝ……マスター、いつもの」

俺の『いつもの』の戸惑い方に、彼女は笑う。

何てこった。  
テイルに見とれてしまっていた。薬が効きすぎてる。

「きっかけが無いと、最後までこういう事出来ないもんですね」

「ん？ それは、」

「何でもないです」

遮るようにそう言って、テイルは話題を変える。  
少し気になりはしたが、俺はそのままそれに従っておく事にした。

やはり俺はおかしくなってる。  
どうも、酒を一滴も飲んでいないのに、俺は酔ってるらしい。

目の前にいるのは、地球人類的に言えば単なる『化け物』だ。

だっていうのに――

「ロン」

「なんだ？」

「今日、あなた変ですよ？」

「君ほどじゃない」

――3年。いや、正確には13年ぶりに、  
俺は初恋の高校生の様にドキドキしていたから。



結局、奴等との交渉は上手く行かなかった。

例の衛星爆破事件から、あらゆる手を使った。  
俺のちっぽけなキャリアで培ったあらゆる知識を駆使してみた。

少しでも、多少でも優勢に出来ないかと、努力してみたつもりだ。  
だけれども、そもそもが『死ね』と要求している相手に交渉もへったくれもない。

ただ、精々。  
時間を稼ぐくらいが関の山。

必死で2・3週間ほど稼いだ所で。  
奴等の言うタイムリミットまで30時間を切るのは、あつという間の事だった。

\*\*\*

俺が垂れた鼻水を自分で始末出来る様になった頃。  
要は、祖父が死んでから三年後の事だ。

人類と地球外知的生命体との接触というニュースは、合衆国国民の誰もが予想していた NASA  
からの発表という形ではなく、月面の『奴等』からの一方的な占領通信という形で伝えられた。

当時、俺は九九が自慢の7歳という体たらくだったが、情勢くらいは分かる。

人類は『やっと火星に基地を作ったぞ！』と言ってドヤ顔してるくらい。  
向こうは、こっちが観測できないくらい彼方から軍隊を送ってくるくらい。

結果は明白だった。

こうして、人類は3日と持たずに占領されました……と言いたいところだが、実際はそうじゃない。

人類は結構頑張った。  
なんと3年くらい頑張った。

勿論、互角に戦ったと言えば語弊が出る。

あちらさんは『資源に溢れた星』と『死ぬまでタダでこき使える労働者』が欲しかったわけで。腹立ったからと言って、地表ごと吹き飛ばしてしまっただけは意味が無い。

こちらとしてはそんな事になるぐらいなら、『どうしても侵攻してくるならば、世界中の原子力施設に向けて核ミサイルをぶち込んでやる！』と自爆宣言をして脅したのだ。

そうして、睨み合いが三年も続き。宇宙からの『解放軍』なるものが現れたときには、地球はすっかり戦勝国扱いになっていた。

戦勝『国』と書くと語弊があるが、ニュアンスは一緒なのでまあいいだろう。

とにかく、地球人類は『勝った』らしい。

勿論、実際にはただ水際の防衛線を必死で守っていただけだ。敵を撤退させたのも、自らによるものではない。

だが銀河的には、占領された後の『解放』ではなく、接触した時に既に『独立』していた事がミソだった。攻撃を受け、占領されずに終戦を迎えればそれは勝者らしい。

『勝者』と『敗者』では扱いが全く違うことは、世界大戦を経験した事が無い世代でも分かるだろう。

口先は銀河レベルで達者だった地球人類は、『勝者』の権利をフルに使って技術を勢力を伸ばしまくりに……ついに、『常任理事』入りを果たした。

これはもう、地球史どころか銀河史でみても大事件だ。キリストが復活したとしても、ここまで大事件にはなるまい。

何もかもが変わった。石油どころか原子力でさえも鼻で笑われ、恒星から直接エネルギーを取り出す時代が到来した。

だが、お偉方がそんなに四方八方頑張っている。下っ端の、しかも閑職を自ら希望している様な男には関係ない。

まるで関係の無い、雲の上の出来事。

そう、思っていた。

思っていたんだけど、ね。

\*\*\*

今でも思い出す。  
やたらと立派な、真っ赤な封筒だった。

机の上にそれを置いていった上司は、こちらを振り返りもしない。

書面は言う。

『——貴殿を、銀河前任特使に任命する』

その後もつらつらと大層な言葉が続くが、要約するところだ。

「昇進させてやっから、銀河の果てまで行って来い！ って事だよ！！ 分かるか！！？ その時の俺の気持ちがよ！！ おおっ！！！」

「……えーと、」

仕事終わり。  
リミットまで、もう24時間は切っている。

俺は珍しく、というか初めてだ。

レニーの誘いに乗って、歓楽街に来ていた。

「分かります……といえば嘘になりますが、何となく察しは付きますよ」

ニコニコと笑顔で(未だに多分笑顔だという予想だが)、レニーは頷く。  
ホールライトの光が、彼の固い外骨格を灰かに赤く照らした。

ここは出向してきた地球人類向けの娯楽施設だ。  
気を使っているのか何なのか、我らが兄弟である昆虫諸兄がバンドなんか組んだりして地球では『懐かし』の曲なんかを演奏したりしている。ビールもどきまである。

「ハッ、分かるもんかよ！ こうやってヌクヌクと生まれ育った星で暮らしてる奴にっ！！」

「恐縮です」

そう言って、頭部をやや引っ込めた。

「良いか？ あいつらは誰でも良かったんだ。ただ、常任に入るにゃよ、銀河の為に貢献してないと駄目なんだ。分かるだろ？ だから、銀河の端っこまで突っ走ってもらって、『異常なし！』って言い続ける馬鹿が必要だったんだ。生贄だよ。それが俺だ」

「はあ……分かります」

「バカヤロ、分かってんなら黙ってる！ こいつは愚痴だぞ！？」

「すみません」

「ちっ……」

理不尽な事は分かっていたが、舌打ちする。  
こうでもしないとやっついてられない。

それくらい、今の俺の状況……いや、俺だけで済まない状況は最悪だ。

「いいかよ。飛ばされた当時、俺はまだ二十歳だったんだ。それが今じゃ33だ。ここで仕事して三年になる。つまり、この銀河の端っこに来るのに10年も掛かっちゃった。それも、高光速度に耐える為にお寝んねした状態でな！ ……気が付いたらおっさんってワケよ」

「はあ」

「相槌はうたなくて良い。良いか？ 俺はな、20だったんだぞ？ ピチピチだったはずなんだぞ？ それで、寝て、起きたら30のおっさんだ。その分給料は増えたが、だからなんだっつーんだ！ こんな女もいねえ様な辺境に飛ばされて、誰に貢げっていうんだよ！？ 愛玩ロボットでも作れっか！！？ 俺は技術屋じゃねーんだぞっ！！！」

「……はあ」

「相槌は打つなって言ってるだろ！！！」

ドンと机を鳴らしてもみても、誰もこちらに振り返りもしない。  
ホールは今最高潮で、この惑星出身のダンサー達がステージで踊り始めている。

勿論、俺にはメスだかオスだか分かりやしない。

「うるせえなあ」

「そういう場所ですから」

「大体こいつらは何なんだ？ 自分の惑星の衛星が吹っ飛ばされたんだぞ、何でこんなに落ち着いてやがるんだ？ 情報統制も糞も無い大爆発だったろうが」

「慣れてるんですよ」

あっけらかんと、レニーは言う。

「僕らの種族の成り立ちは知ってましたっけ？」

「いや」

「ま、今時珍しくもないんですが、僕らは随分昔に遺伝子操作で兵隊用に作られた種族でしてね。この惑星はまあ、その養殖場みたいなもんで。一昔前は軍事的に非常に価値があったらしいんですよ」

「何故？ 地理的に良い場所には思えないが」

「そう。地理的には価値はないんですが、僕らの『養殖場』という意味で価値があった」

『飲みます？』とビールを勧めながら、彼は続ける。

「僕らはね。戦場では勇敢に戦うし、上の命令は良く聞くという長所があったんですが、それ以上に大きな特徴があった。それは『独立心』がない事です」

「独立心？」

「そうです、独立心。惑星由来の種族なら、ほぼ例外なく持っている筈です。それが無い、それが僕らの大きな特徴でした」

「どういう事だ？」

「んーっと。ボスは惑星由来ですからちょっと分かりにくいかもしれませんが、要は『今後、自分達がどうあるべきか』という事を他人……別の者に委ねたがる。そういう癖があると思って貰えれば」

「奴隷気質って事か？」

「近い……んですかね。具体的には、僕らは今まで自分達の手で独立する機会はいくらでもありました。ですが、幸いな事に『自分達の未来を決めてくれる他の種族』には僕らは困りませんでしたので、今日まで独立せずにやってこれたと。そういうわけですね」

「今は、独立してるはずだが？」

「建前はね。僕らはそれを望みませんし、奴隷になってくれるというのに拒む所はありませんよ」

「……」

「ま、そういうわけで。惑星自体に帰属意識がある者殆どいませんし、上のドンチャン騒ぎにいちいち目くら立てる人もいないんですよ」

奇妙な感覚だった。

年単位の付き合いのある相手だったが、思っていた以上に得体の知れない相手だったのかもしれない。

「なあ、それって……」

『家畜と何が違うんだ？』と言い掛けて、止めた。  
言ってみた所で仕方が無い。

それに、家畜は柵が無ければ逃げ出す。

「だから一般の人は、衛星が吹っ飛んだくらいじゃ『また主人が変わるのか』くらいにしか思っていないでしょう……と言っても、今回の相手の要求を知ったらパニックにはなるでしょうがね」

そう、それだ。

この惑星とその住民の成り立ちなんか興味は無い。

今、一番俺の状況を最悪にしてるのはあのイカれた石ころ共だ。

「何せ、『自殺しろ』ですからねえ。流石にまいりますよ」

「死にたくはないわけか」

「当たり前でしょう。じゃないと戦いません」

でも命令されりゃ戦場には行く、不思議なもんだ。

という事は、これはお互いの問題らしい。

「どーすりゃいいのかねえ」

「発表は結果と同時で十分ですが……まあ、それで話があるんよ」

急に身を乗り出して、レニーは言う。

別にこの世を偲んだり愚痴を言い合う為に、ここに連れて来たわけでは無いからだった。

「今の手札じゃあ、何を切った所で八方ふさがりだぞ。勝てはしない」

「それは分かっています」

「じゃあ、どうして？」

正直、余計な事で頭を悩ますよりも、ただひたすら愚痴り続けていたい。

けども、そんな濁った俺の目とは対極的に、レニーの目は爛々と輝いていた。

「今の手札じゃなく、新しい手札があるかもしれません」

「ねーな」

断定して愚にも付かない話を止めさせようとする、それに被せる様にレニーは言った。

「彼女、……ティルの事ですが、何で彼らの言葉が話せたんでしょうね」

「……」

言われてみて、はじめて気が付いた。

『通訳だから』という事で思考停止していた。

確かに彼女は通訳に向けた種族だが、比較的分かりやすい地球人類の言葉でさえ使いこなすには3週間は掛かっている。

それをあの文法も音節も無さそうな、妙なカチカチ鳴るだけの言葉を3日程で使いこなしていた。

確かに妙だ。

「彼女翻訳が、間違っているっていうのか？」

「いや、それは無いでしょう。実際、衛星は吹き飛びましたし」

付いてる出窓から、星空を指差しながらレニーは続ける。

「ですが、以前にも彼らと接触があったとしか思えません。ボスは自分の眩暈を抑えるのに必死で気付かなかったかもしれませんが、彼らと最初の接触があった日、彼女の様子はおかしかった」

「うん……」

思い返してみても、視界が赤くなるのを必死で耐えている記憶しかないが、レニーがそう言うのならそうなのだろう。

「というわけで、行って下さい」

カチャリと、テーブルに鍵が置かれた。

「……は？」

「シティホテルの、千の700番です。待ち合わせは、あと10分後になります」

あっさりとレニーはそんな事を言うが、色々と突然話が進みすぎて付いて行けない。

「なんだ？ どういう意味だコレは？」

「そこに、彼女が居ます。時間もありませんし、急いで下さい」

「……聞き出せっていうのか？」

手の早い事だ。

もっとも、そうでなくてはもう間に合わない時間だが。

「そうです。部屋代は経費で落とさせますから、制限時間は3時間厳守でお願いします」

「まてまて、どうやって彼女を其処におびき寄せた？ そして、何故俺だ？ その二つを答えろ」

「その答えは一つで済みます」

「質問は二つだ」

「ですが、答えは一つです」

何だ？ なんでコイツはこんなにもったいぶってやがるんだ？

俺の苛立ちが募るより先に、レニーは続けた。

「お気づきでないんですか？」

「何も聞かされてない」

「それはそうでしょう。 ですが、お気づきでしょう？」

嫌な予感がした。

「彼女は非常に礼儀正しい人だ。そして優秀です。この三年間、貴方に忠実に仕えてきた」

「……」

「しかし、フタイムル星人は給与以上の事はしないものです。それは厳守すると言い換えても良い。そのぐらい、彼らは与えられたキャッシュに忠実なんです」

「まで」

「待てません、時間がないので。……では、なぜ？ 彼女はキャッシュに含まれない貴方の時間管理までやっていたのか。何故、仕事中に、キャッシュに含まれるはずの『上司の呼称には敬語を使う』という基本をこなさなかったのか」

「……あのな、」

「時間です。行って下さい」

自分でも、情けない位に動揺していた。

多分、昔馴染みの友人共が見たら、人目もはばからず爆笑していただろう。

「女性を待たせるものじゃないですよ」

付け加えるように言って、レニーはまたも珍しく骨格を鳴らさずに笑う。  
笑っていたのだ。

そう、この虫野郎。  
地球人類の誰が見ても分かるくらいに、見事なまでの笑顔で笑っていやがったのだ。

\*\*\*

シティホテルの千の700番に入ると、既に彼女は居た。

「こんばんわ、ロン」

「こんばんわ」



苦虫を嘔み潰した様な顔をしている俺を見て、ティルは妙な顔をした。

「レニーにここに来るように言われてきたのですが……もしかして、貴方が呼んだんじゃないのですか？」

その言葉で、確信する。

答えは、本当に一つらしい。

「マジかよ……」

眩いて、フラフラとベッドに腰を下ろす。

酷い眩暈だ。

今日は安定剤は飲んでいない。

「ロン……大丈夫ですか？」

「大丈夫、大丈夫だ」

『だから来なくて良い』と身振りで示す。

そんな俺の様子に、彼女は寂しげな表情を見せた。

そう、寂しそうなんだよ。

いつからだ？ いつから彼女はこういう態度を取るようになった？

「いや、それはいい……それは今はいい。うん」

「あの、」

「確かに、呼んだのは俺だ。俺でいい」

『そうですか』と眩く彼女の顔は、酷く嬉しそうだった。

それに呼応する様に眩暈も酷くなるが、今は役割をこなさなくてはならない。

「質問がある」

「はい」

「君はスパイか？」

彼女の表情が、崩れていくのが分かった。

「そっか。……やっぱり、そういう事ですよ」

その人類に良く似た表情に、胃が穴が開きそうな位痛くなる。

だが、それは今は関係ない。

「君は、あの石ころ共のスパイなのか？」

「はい」

予想よりもずっとあっさりと、彼女は答えた。

眩暈が酷い。

視界が半分以上真っ赤だ。

「どうして……いや、理由はいくらでもあるだろう。だけど、」

「必要性が無い、と。そう思いで？」

沈黙で答えると、彼女は笑った。

「それを答えてはスパイになりませんよ」

「話せる範囲だけでもいい」

「そうですね。『彼らのスパイになったのは、彼らに拾われた経験があるから』くらいですかね」

それだけ言って、彼女は黙る。

俺はといえば、例のあの情けない顔だ。

「頼むよ。瀬戸際だって分かってるんだろ？」

「無理ですよ」

『給与外』です。

そう言って、彼女は笑った。

でも、それは、何かを期待する顔で。

ああ、くそっ！ やっぱりこうなるかよ、クソツタレ！！ あの虫野郎の思う通りじゃないか！！！！

そうして、あの野郎の思う通りだとしたら。

俺はこう提案するしかないじゃないか！！！！

「どうしたら給与内に出来る？」

「ご存知でしょう？」

彼女は、小さく、可愛らしく笑う。

それは懐かしの祖国の女優の様な笑い方だ。

彼女は、もう。随分とそれらを研究しているらしい。

「俺の口からは、言えない」

「貴方の本心では無いから、ですか？」

『そうだ』と答えそうになった。  
だけど、乾ききった口からはそんな声は漏れなかった。

保身の為じゃない。  
俺は、

「分からない」

絞るように、苦しむようにして出したその言葉に。  
顔まで真っ赤に染まってしまう。

「ありがとう」

だけど、それだけでも、彼女は満足そうだった。

視界は、いつの間にかクリアになっている。

「納得のいく、報酬が欲しいのです」

「給与なら俺の分をくれてやる」

「給与ではいくら0が並んでも、納得出来ません」

『分かってるでしょう？』と呟いて、彼女はにっこりと笑う。  
そのまま、彼女はベッドへと移動した。

いつからだ？ ああ、いつから彼女……いや、この『女』はこうも笑顔が豊富になった？

「もっと、個人的な報酬が……欲しいのです」

そう言った彼女の髪は、他の何よりも艶やかに濡れていた。

\*\*\*

タイムリミットまで、あと5時間を切っている。  
石ころ共に無理やり開かせた会談会場に向かいながら、俺は愚痴を聞いていた。

「ボス……言ったでしょう？ 3時間厳守でお願いしますって」

「忘れてた」

「それにしたって……」

「しょーがねーだろ、こっちは10年とんで3年分だったんだからよお」

「気持ちは分かりますけどねえ、いくらなんでも…」

「ロン、もう会場に着くわ」

隣を一緒に歩いていたティルが、そう合図する。

「わりい、そういう事だから」

「ちょっと、まー」

それを理由にして、レニーとの通信を切った。

ワザワザ通信してまで愚痴を言うとは、めんどくせえ奴だ。

「彼も変わりましたね」

横で、ティルはクスクスと笑う。

「そーかい」

確かに、最初はずっと義務的な会話しかしない奴だった様な気がする。

「レニーが小惑星帯に付くまで、急いでも3時間は掛かります。上手くその時間で付いたとしても、2時間で見つけるならギリギリでしょう。また、会議自体も数をこちらに割けるだけで、おそらく引き延ばしも効きません」

「ロスタイムは無いつて事か」

「そういう事です」

\*

あの後。  
つまり俺の『おつとめ』の後。

ティルから聞き出した『給与外』は中々の内容だった。

「つまり、奴等はこっちの宇宙の法則とは違う法則の所から来たって事か？」

「はい」

事後。

ホテルのベッドの上で、俺たちは話していた。

酷く濡れてしまった髪をタオルで拭いながら、ティルは続ける。

「彼らの主成分は、ケイ素です。というか、99パーセントがケイ素です。残り1パーセントはただの不純物です」

「……マジかよ」

確かに、そんな物はこっちの物理法則では唯の鉱物でしかない。

鉱物系と言われる種族はいるが、その中身はロボットみたいに配線が走りまくっている。地球人類が宇宙に進出してから科学の常識は変わりまくったが、それはどれもニュートンとアインシュタインの提示した理論の延長線上にしかなかった筈だ。

「ですから、本来ならこちらの法則に入ってきた段階で、彼らは単なるケイ素の塊でしか無い筈なのです」

「じゃあ、何で……いや、そもそもワザワザ苦勞してこっちに来た理由は……」

ピッと、ティルは俺の唇に指をあてた。

「落ち着いて下さい。順を追って話します」

フツと笑って、彼女は使っていたタオルをゴミ箱に投げ入れる。

「そもそも、私が彼らに拾われたのは空間転移の生態実験の為です」

「モルモットになったのか？」

「いえ、私が研究していました」

初耳だ。

科学者だったのか。

「生体実験は禁止されていたので、戻って来た折に身元と名前を変えましたが。とにかく、私は空間を捻じ曲げて、質量を任意の場所に転移させる実験をしていました」

「それで？」

「実験は、決して成功しませんでした。どんな大きさだろうと、どんな物質だろうと、捻じ曲げた空間に突っ込む事は出来ましたが、出てくる事は無かった」

「ぶっ壊れてたんじゃないの？」

「そう言われていました。捻じ曲げた空間の中で、捻じ切れて粉々になっているんだらうというのがスポンサーの見解でした。でも、私は納得出来なかつたんです。そもそも、理論的に空間で捻じ曲げられるという仮定自体がおかしかった。そういうものではないんです。素・空間物理論の仮定では——」

「待って、俺は科学者でも技術屋でもない。専門的な事はさっぱりだ」

「——失礼。とにかく、送った物は必ず『何処か』に送られている。例えそれが、我々の知覚出来ない場所だとしても……そう思いました」

「それが確認したくて、自分を飛ばしたと？」

「そうです」

大した根性だ。  
マッドサイエンティストには変わらないが、自分で行ってるだけマシだ。

「着いたのは、ただ白だけの空間でした」

「へえ？」

「すみません、情景描写に語彙が無いようですが、本当にただぼんやりと明るいだけの真っ白な空間だったんです。奥行き……という概念が存在しているかどうかとも怪しかった」

「そこに石ころが居たの？」

「ええ、居ました。しかも、それだけじゃない。私が送った諸々の荷物達もいました。いいですか？ここからが重要です。それらは、もう『それら』では無かった。『彼ら』になっていたんです」

「……喋ってたってこと？」

「それは良く覚えていませんが、動いていました。その場所は『形ある物は全て動き・意志を持つ』という場所だったんですよ」

正直、普通の時に聞いていたなら、いくら彼女の話でも笑って相手にしなかつたらう。けど、実際実物を見ているから信じる以外にどうしようもない。

「分かった。ここまでが事実として、何で奴等は『こっち』でも動いてられるんだ？ そして何で『こっち』を知ってる？ 君が教えたのか？」

「私が教えたわけではありません。ここは信じて貰えますか？」

「信じよう」

「ありがとうございます……彼らは最初からこちらを知っていました。いや、恐れていました」

それは、ちょっとした衝撃発言だった。  
あれだけ横柄な態度に出れる奴等がこちらを恐れていたとは、意外だ。

「別に、我々を恐れていたわけではありません。彼らはしきりにある種族について尋ねて来ました。『こっち』にいる種族の事です。しかし、今の銀河史にはそんな種族に関する記録はありません」

「どういうことだ？」

「今の銀河史は、どんなに広く紐解いても大体2億年程しかありません。おそらく、それ以前に栄えた種族なのでしょう……彼らには、20億年にのぼる歴史がありました。これは私の勝手な予想ですが、おそらく彼らの存在する空間そのものがその種族の実験の成果だったのでしょう」

「……」

何だか壮大過な話になっていた。  
新参も新参の地球人類の俺には、頭が痛すぎる話だ。

「つまり、恐れるご主人様がいなくなってるから、侵攻しましょ、って事か？」

「そうですね。あの場所は、決して広くありませんので」

「物理法則はどうしたんだ？ どうやって解消した」

「その技術は既に開発していたようです。理論だけ言えば、自分達のまわりだけ自分たちの世界と同じにする、という単純なものです」

「おいおい」

「勿論、それは彼らにしても簡単ではなかった様です。10億年掛かったと言っていました」

「……時間に物を言わせたわけか」

「でしょうね。彼らは主人に放置されてからは、あの場所で他にする事も無かったようですから。彼らには破壊される以外に、終わりはないので」

なるほどな。  
単純な構成の無機物だからやれる荒業ってわけか。

「さて、ここからが本題です」

「うん」

姿勢を正す。  
そんな俺の様子を見て、ティルはクスリと笑った。

\*

「レニーが向かってる小惑星帯の中に、トラック位のサイズのその装置がある。って事だよな？」

会談を行いながら、確認を取る。  
時間稼ぎの通訳を行いながらも、ティルは答えた。

「ええ。流石のこの人達も、あれ以上の小型化は出来なかった様です。そもそも向こうからこちらに通れる穴がそう大きくないので、アレもこっちにきて組み立てなくちゃいけませんでした」

「どうやってやったんだ？」

「私が」

「……」

「そう睨まないで下さい。私はアレが何か、分からなかったんです」

「つってもなあ」

「言いつこなしでしょう。あの時、私はあんなもの無くて彼らは私を殺せると思っていましたから」

「分かった時に、すぐに伝えて欲しかった」

「監視が無くなったのは最近ですし……それに、チャンスだと思ったので」

言いながら、彼女は『仕方ないでしょ』と言わんばかりに舌を出す真似事をしてみせる。

恐ろしい。  
なんつー女だ。

「許してくれますよね？」

当然、という顔でティルはそう言う。

『ああ』と曖昧に頷いて、聞こえないように呟いた。

「……これだから女は。一回だけで何もかも自分の物になったと思いやがる」

「何か、おっしゃいました？」

「なにも」

本当に、恐ろしい生き物だ。



——カチカチカチカチッ！！

石ころ共が、やたらとうるさい。

『本部と通信が取れないから』

という事で結論を先延ばしにしてきたが、そろそろ限界かもしれない。

こいつらが自分で提案した事に対してはやたらと律儀だから良かったが、我が同胞達の流儀だったらもうとっくに殺されている頃だ。

「レニー、頼むぞ」

遠くの星々に向けて、呟く。

カウントは残り一時間を切っていた。

\*\*\*

「1、2、3、4……って、おいおい。話が違うぞ」

指示された小惑星帯を飛び回りながら、レニーは使い慣れた地元の言葉で愚痴を足れた。

今、レニーはテイルに指示された小惑星軍に到着している。  
例のアレも、予想以上に早く見つけた。

全ては彼の自前の触覚と、その知覚範囲を広げてくれるこの戦闘機『Bee』の機能のお陰だ。

そう全てはそのお陰、だからこそ、彼は今この瞬間まで命拾いしていた。

「なんだよお、護衛はいねえって言ってたのに」

飛んでくる光学兵器を、もうほぼ勘で避けながら、レニーは愚痴る。

テイルの話によると、  
石ころ共は自信過剰な上に数も多くないので護衛は精々居て一機程度。いやむしろ居ない。

との事だったのだ。

だが、実際は、4機。

視認出来ない所にも、おそらくあと2機はいる。

「話が旨すぎると思ったぜ」

よくよく考えれば、ここは敵の砦に等しい。  
いくら会談に人が割かれると言っても、この位は護衛が居て当然だ。

「生まれに感謝したのははじめ——って、——あぶねっ!？」

間一髪、機首上方からの光線をかわす。

「避けるので精一杯だ」

それでも大したものだ。  
一般的な『人類』の類が乗っていたら、まず避けられない。

彼の『戦闘用』としての生まれと経験が、この状況でどうにか彼を生かしていた。

「あちらさんが下手くそじゃなかったら、とっくに轟沈だな」

それもある。  
『石ころ』共は基本、戦闘というもののはじめてなのだ。

「しかし、まあ壁共が何処まで持つか」

場所が小惑星帯……デブリ地帯だという事も幸いしていた。  
彼らはデブリを使う、という事を知らない。

彼らの流線型の棒の様な機体から放たれる光線は、そんな物をお構いなしに貫く。  
が、デブリに隠れば目視の索敵は出来なくなるし、光学兵器と言えど射線を逸らす事も出来る。  
それらを使って、彼は攻撃をかわしていた。

また、彼らには追尾性の実弾兵器が無い事も幸いしていた。

「それはこちらも同じだけだな」

拡張機能で光線が鼻先を掠めた様な錯覚を起こしながら、レニーは呟く。  
宇宙空間での追尾性の実弾兵器など、先の大戦でジャミング装備が標準規格になってからはお払い箱になっていた。

99%の確立で、自分へと戻ってくる。

「十八億年近い歴史の差があっても、戦闘機に関しちゃどっこいどっこいか」

呟いて、レニーは視界の端を探した。

「……あるな」

纏わり付いてくる戦闘機共が下手くそなせいで、既に複眼の片隅にあの例の装置が見えた。  
やたらとゴテゴテして瞬いていて、目立つたらありやしない。

「突っ込む事も出来ねえな」

やつらがよっぽどの間抜けなら、突っ込んで英雄になる事も出来る。  
そのぐらいの距離だ。

だが、それじゃ意味が無い。  
アレをぶっ壊したって、こっちがおっ死んだらまるで駄目だ。

そもそも、射線上にアレを捕らえた瞬間に撃墜されるのは目に見えていた。

「やるっきゃねーか」

機首を垂直に上げる。

どっちか上か下かは関係ない。  
ここでは上だと思ったほうが上だ。

「……」

複眼の後方で、捉えた。  
レーダーで確認を取っていたら死ぬ。

4機とも、来る。

「っ」

エルロンロールを半回転、天地を逆転させてスプリットSに突入し、今度は機首を下へ叩き落す。

慣性の引き連れたプラスGからマイナスGへの大転換。  
複眼の3割が真っ赤に染まるが関係ない。

4機の流線型と、もの凄い相対速度の直交軌道上ですれ違った。

——こっからは性能勝負だ！！！！

カタカタと骨格を鳴らす。声にはならない。  
それが、彼の脳みそを沸騰させる。

見えた！ 三匹共ノロマじゃねーかつ！！！！

相対G上の旋回勝負に、やつらは付いていってない。  
複眼のど真ん中で捉える頃になっても、未だにケツを振ってやがる。

終わりだ。

「——ッ！！！！」

叫んだ。

それは言葉にならない咆哮。

チカチカチカチカッ、と4筋の閃光が走る。

それが消える頃には、新たな光がそれらの軌跡を描いた。

4機とも、爆散したのだ。

「——っしやああああああああっ！ 何十億年も戦争しねえからこういう事になるんだよおおお  
おおおおおおっ！！！」

やった。

やったった。

ブチ殺したった。

科学が一步も二歩も進んだ相手に、旧時代の兵器でドツいてやった。

これで俺は英雄だ。

後はあの忌々しい糞装置を破壊して、悠々と帰れば——。

「——え？」

光が、走った。

3割赤くなっていた複眼が、全て真っ赤に染まった。

\*

カウントは、もう残り5分を切っていた。

「くそ、レニーから連絡がこねえ。どうしたんだよ」

「……」

苛立ちのまま呟くが、ティルからの反応は無い。

間もたせの通訳を続けながら、彼女は何か考え込んでいる。

「やっぱり、護衛が居たんじゃないか」

「……」

「なあ、おい」

「……護衛が居るのは、百も承知です」

突然、キッパリと言い切る様に彼女はそう言った。

「だって、お前……」

「あの場ではああ言って気楽にさせるしかないでしょう。そんな事、レニーだって知ってます」

少し呆れる様に、彼女は言う。

「元々絶望的だってのは、分かってました」

「だけど、ちゃんと知ってたらレニーだって行ったかどうか……」

「違います。彼の種族の由来を聞いたでしょう？ 命令されたら、行く以外の選択肢は彼らには元々無いんです。それとも、命令せずにいられたんですか？」

「……」

そんな事を言われたら、何もいえない。  
俺を含めた俺の手札の中で、戦闘機に乗れるのは彼だけだ。

個人的にも、職務的にも、彼に命令を出さないという選択肢は俺の中に無かった。

「なら、信じて待しか……いや、もう覚悟を決めた方が良いみたいですね」

残り時間が、30秒を切る。  
石ころ共が、カタカタと鳴り出した。

「まずはここからぶっ飛ばすそうです。……本当はこの辺りで私を回収してくれる手筈だったんですが、何も動きが無い辺り、裏切ったのバレバレみたいですね」

「あー、すまん」

「いいですよ、むしろ満足しました。私にとっては、ほぼ予定通りです」

艶やかに髪を塗らした彼女は、言葉通り、とても満足気で。

「そっか」

残り時間は2秒。  
おそらく最後の思考になるんだけど、

『——女は怖い』

そう思うので、精一杯だった。

\*

……マジかよ。

視界が、無い。  
咄嗟に思い出す。

そういえば、まだあと2機居たんだっけ。  
ああね、なるほどね。

かろうじて残った触覚の知覚範囲でそれを確認する。  
4機は囿で、この2機は隙を狙ってたってわけか。

そういう発想がこいつらにあったとは、驚きだ。

「だが、アホウだな」

発声してみて、まだ口が残ってる事に気がついた。  
そして、ついでに分かる。

「機体がまだ残っていて、こいつ行き着く先は……ハハッ、今頃慌ててやがる」

慌てて旋回しだすウスノロ共を尻目に、『Bee』はブンブン飛んで行く。  
よっぽど慌てたのか、デブリに機体を打ち付けるのもお構いなした。

その愉快的様を、実はレニーは最後まで覚えてはいない。

触覚を失ったのと、体自体を失ったのと、

結局の所どっちが先か、彼には分からなかったからだ。

\*\*\*

拝啓、お袋様。

お元気ですか？

こちらは元気でやっています。

といっても、これがそちらに届くのは私がこれを書いてから3ヶ月掛かりますので、そういう意味での健在だと思っていてください。

そちらは、お変わりありませんか？

こちらは色々とありました。

端的に言わせて貰うと、

石ころが動き出して、それを止めたら結果として友人が死にました。

何を言ってるのか分かりませんよね。

ですが、これ以上の説明の方法も無いのです。

そういう物だとお受け取りください。

そうそう、以前から言われていました『孫の顔が見たい』との事ですが、

実は――

とそこまで書きかけて、手紙を破いた。

「どうしたんですか？」

覗きこんでくる奴がいる。

ティルだ。

「いや、確信も持てない事を書くべきじゃないと思って」

「期待して良いんですよ？」

「ああ」

曖昧に、答えておく。

「もうちょっとで、きっかけが掴めそうです」

彼女は今、遺伝学にはまっている。

両親からの『孫の顔はまだか？』という気が狂った手紙を見られたのが原因だ。  
彼女は、人と魚並に遺伝的に差異のあるつがいを作ろうとしているらしい。

勿論、俺と彼女だ。

「順番、来ましたよ」

「分かった」

立ち上がる。

実は、今はレニーの葬式中だった。

「どうも」

「\* # \$ % & ’」

彼の両親に挨拶する。  
答えられるが、勿論俺には分からない。

両親に対して、関わった人が挨拶し、何かお言葉を頂くのがこの星の葬儀のやり方だった。

「’ & % \$ #」

慰めなのか、罵倒なのか。  
それすらも分からない。

「# \$ % & \$ % & \$」

「……」

この言葉は、後で訳して貰える。  
罵倒のほうが楽なんだろうけど、きっと世の中そんなに甘くないだろう。

「% & ’ ( )」

終わったらしい。



「ありがとうございました」

挨拶して、退出する。

「あいつ……両親そっくりだな」

呟く。

レニーの遺体は回収されなかった。  
死亡時刻も、良く分からない。

石ころ共が本当に石ころになっちゃったのが、カウントのラスト1秒での出来事だったから多分その辺りで散ったのだろうが。

機体ごと宇宙の藻屑になってしまったから、正確な事は何も分からない。

「何を考えてるんですか？」

退出すると、テイルが待っていた。

「ん？」

考えていたのは、気恥ずかしい事だ。  
曖昧にかわそうとしたが、何故だかしつこい。

「そうだな……」

考えていた事は、こうだ。

レニーは、死んだんじゃなくて、何処かに行ってしまっただけかもしれない。  
だって、機体の残骸すら出ていないのだ。

それに、あのワケの分からん奴等の、ワケの分からん機械に突っ込んだわけで。  
もしからしたら、この目の前にいる女のように別の場所。

そう、何処か、星の彼方に――。

「で、何考えてるんですか？」

「あー……」

思った通り言うのは、気恥ずかしい。

「星の彼方の――……両親への良い訳かな」

曖昧にごまかして、俺はその場を後にした。

おわれ。